IBM Business Monitor Development Toolkit

インストール・ガイド

バージョン 8 リリース 0

IBM Business Monitor Development Toolkit

インストール・ガイド

バージョン 8 リリース 0

ご利用条件

これらの資料は、以下の条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

個人使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商業的使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。 ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態で提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

© Copyright IBM Corporation 2011.

第 1 章 ツールキットのインストールおよび除去

IBM® Business Monitor Development Toolkit には、モニター・モデルの作成とテストに役立つウィザード、ライブラリー、およびテスト環境が用意されています。Business Monitor Development Toolkit は既存の Rational® Application Developer 環境または IBM Integration Designer 環境にインストールされます。

Business Monitor Development Toolkit を構成する主なコンポーネントは、次の 2 つです。

- 開発環境
- テスト環境

開発環境には、モニター・モデル・エディターとデバッガーが用意されています。モニター・モデル・エディターを使用すると、新規にモニター・モデルを作成したり、WebSphere® Business Modeler から予備モニター・モデルをインポートしたりできます。IBM Integration Designer で開発ツールキットを使用している場合は、Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus アプリケーションからモニター・モデルを生成できます。モニター・モデル・エディターを使用すると、生成またはインポートしたモニター・モデルを拡張および詳細化することができます。デバッガーを使用すると、モニター・モデルのテスト中に見つかった問題をトラブルシューティングしたり、またはモニター・モデルでどのように情報が収集されるかを理解したりすることができます。

テスト環境には、Business Space などの完全な Business Monitor サーバーが含まれています。

テスト環境を使用して、モニター・モデルのサーバーへのデプロイおよび Business Space のデータの表示を行うことができます。テスト環境は、以下の作業もサポートします。

- 迅速な繰り返し型開発を促進する (リパブリッシュ・サポートを使用)。
- テスト・イベントを作成して発行できるようにする

重要:

- モニター・モデルのデプロイに使用する予定のサーバーと同じバージョンの開発ツールキットを使用する必要があります。例えば、モニター・モデルの作成に Business Monitor Development Toolkit 8.0 を使用している場合は、Business Monitor サーバー 8.0 を使用してモデルを実稼働環境にデプロイする必要があります。

ここでのインストールおよび削除に関する情報は、Rational Application Developer での Business Monitor Development Toolkit のインストールに関連するものです。ツールキットを IBM Integration Designer にインストールするには、IBM Integration Designer の「機能」ページで、「**モニター・モデル・エディター**」機能を選択します。

© Copyright IBM Corp. 2011

ヒント: SVG ダイアグラムを最適に表示するには、IBM Integration Designer または Rational Application Developer をインストールするときに、「**Web 開発ツール**」をインストールします。

Rational Application Developer へのインストールを続行する前に、Business Monitor Development Toolkit DVD またはダウンロード可能イメージを使用可能にしておく必要があります。ダウンロード可能イメージを使用する場合は、ファイルを一時ディレクトリーに抽出する必要があります。

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

インストール計画

Business Monitor Development Toolkit では Rational Application Developer 8.0.4 が必要であり、Windows オペレーティング・システムで稼働します。

最新のソフトウェア要件とハードウェア要件については、IBM Business Process Manager のシステム要件を参照してください。

非管理ユーザーに関する考慮事項

非管理者ユーザーまたは非 root ユーザーとして Business Monitor Development Toolkit をインストールする場合は、Business Monitor Development Toolkit のインストールの開始前に DB2 をインストールする必要があります。

非管理者ユーザーとしてインストールする場合、以下の方法から選択できます。

- Business Monitor Development Toolkit をインストールする前に、DB2 サーバーを個別にインストールします。非管理者ユーザーまたは非 root ユーザーとして DB2 をインストールする方法については、『DB2 サーバー製品のインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』を参照してください。
- 管理者としてログオンし、Business Monitor Development Toolkit インストーラーを使用して DB2 サーバーを単独でインストールします。非管理ユーザーに特別な権限を付与します。その後、非管理者ユーザーとしてログオンし、インストールされている DB2 サーバーを使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールします。

テスト環境

Business Monitor Development Toolkit のインストールには、IBM Business Monitor テスト環境が含まれています。ローカル・テスト環境とリモート・テスト環境のどちらを使用するかを選択することができます。リソース (CPU、メモリー、ディスク・スペース) に制約のあるシステムを使用している開発者の場合、リモートのテスト環境を構成し、そのリモート環境のテスト・サーバーがそのプロセスおよびモニター・モデルをテストするように設定することをお勧めします。

IBM Business Monitor サーバーがローカルでインストールされている場合、Rational Application Developer はそれを検出し、「サーバー」ビューで表示します。サーバーがリモートでインストールされている場合、新規サーバーを作成することでターゲットとすることができます。

1. 「サーバー」ビューで右クリックし、「**新規**」 > 「**サーバー**」を選択します。
2. 「**IBM**」 > 「**IBM Business Monitor v8.0**」を選択します。
3. リモート・サーバー・ホスト名を指定して、「**次へ**」をクリックします。
4. プロファイル名、接続、およびセキュリティー情報を指定して、「**終了**」をクリックします。

リモート・サーバーで通信の問題が発生した場合 (リモート・サーバーへの公開やサーバー状況の取得の問題など)、『リモート・サーバーでの通信の問題の解決』を参照してください。

Rational Application Developer へのツールキットのインストール

IBM Business Monitor Development Toolkit を既存の Rational Application Developer 環境にインストールできます。 Business Monitor Development Toolkit は、Windows の場合にのみ使用できます。

ここでのインストールおよび削除に関する情報は、Rational Application Developer での Business Monitor Development Toolkit のインストールに関連するものです。ツールキットを IBM Integration Designer にインストールするには、IBM Integration Designer の「機能」ページで、「**モニター・モデル・エディター**」機能を選択します。

Rational Application Developer にインストールを実行する前に、以下の作業を完了している必要があります。

- Rational Application Developer 8.0.4をインストールした。
- そのインストールの一環として、Rational Application Developer フィーチャーである「**WebSphere Application Server バージョン 8.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

注: 電子イメージを (パスポート・アドバンテージ経由で) 使用して、または IBM が提供する物理メディアを使用して Rational Application Developer V8.0.4 をインストールした場合は、以下のことに注意してください。

- Business Monitor には、パスポート・アドバンテージから取得できる永続ライセンスが用意されています。
- Rational Application Developer の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、永続ライセンスを手動でインストールする必要があります。

次のいずれかの方法で、開発ツールキットを Rational Application Developer にインストールできます。

- Business Monitor Development Toolkit 製品ランチパッド・プログラムの使用
- 既存の IBM Installation Manager の使用
- サイレント・インストール方式の使用

関連情報:

IBM Rational Application Developer バージョン 8.0.4 インフォメーション・センター

製品ランチパッド・プログラムを使用して Toolkit を Rational Application Developer にインストールする

インストール・イメージのルート・ディレクトリーから使用できる製品ランチパッド・プログラムを使用して、Business Monitor Development Toolkit を既存の Rational Application Developer 環境にインストールすることができます。ランチパッド・プログラムには、ご使用の環境に適切なオプションを選択する、対話式インストールが用意されています。

Rational Application Developer にインストールを実行する前に、以下の作業を完了している必要があります。

- Rational Application Developer 8.0.4をインストールした。
- そのインストールの一環として、Rational Application Developer フィーチャーである「**WebSphere Application Server バージョン 8.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

注: 電子イメージを (パスポート・アドバンテージ経由で) 使用して、または IBM が提供する物理メディアを使用して Rational Application Developer V8.0.4 をインストールした場合は、以下のことに注意してください。

- Business Monitor には、パスポート・アドバンテージから取得できる永続ライセンスが用意されています。
- Rational Application Developer の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、永続ライセンスを手動でインストールする必要があります。

重要: 非管理者ユーザーまたは非 root ユーザーとしてテスト環境を使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールする場合、インストールの開始前に DB2 をインストールする必要があります。

製品ランチパッド・プログラムを使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールするには、次の手順を実行します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

1. オプション: ダウンロード可能イメージからインストールする場合は、すべてのファイルを抽出します。ファイルはすべてハード・ディスク上の同じ場所に抽出する必要があります。プロンプトが出されたら、ディレクトリーを上書きします。
2. インストール・プログラムを開始するには、`launchpad.exe` か、64 ビット・システムの場合は `launchpad64.exe` を実行します。

   重要: Business Monitor Development Toolkit を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 でインストールまたは実行する場合は、`launchpad.exe` を右クリックして「**管理者として実行**」を選択することにより、Microsoft Windows ユーザー・アカウント特権をプロモートする必要があります。これは、管理ユーザーにも管理ユーザー以外にも必要です。

3. Administrator グループに属しているユーザーの場合、「**管理ユーザーとしてのインストール**」が選択されていることを確認します。 管理ユーザーでない場合、または他のユーザーに特権を与えることなく自分のユーザー名でインストールしたい場合にのみ、このチェック・ボックスのチェック・マークを外してください。
4. 「**インストール**」をクリックして、インストールを開始します。 この操作により、IBM Installation Manager が始動します (または、Installation Manager がインストールされて始動します)。
5. 『IBM Installation Manager を使用したインストール』 に記載されている指示に従って製品をインストールします。

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

IBM Installation Manager を使用したインストール

Installation Manager を使用すると、Rational Application Developer 環境に Business Monitor Development Toolkit を対話式でインストールすることができます。

Rational Application Developer にインストールを実行する前に、以下の作業を完了している必要があります。

- Rational Application Developer 8.0.4をインストールした。
- そのインストールの一環として、Rational Application Developer フィーチャーである「**WebSphere Application Server バージョン 8.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

注: 電子イメージを (パスポート・アドバンテージ経由で) 使用して、または IBM が提供する物理メディアを使用して Rational Application Developer V8.0.4 をインストールした場合は、以下のことに注意してください。

- Business Monitor には、パスポート・アドバンテージから取得できる永続ライセンスが用意されています。
- Rational Application Developer の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、永続ライセンスを手動でインストールする必要があります。

重要: 非管理者ユーザーまたは非 root ユーザーとしてテスト環境を使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールする場合、インストールの開始前に DB2 をインストールする必要があります。

ランチパッドを使用してこの製品をインストールする場合、Installation Manager が自動的に起動されて構成されるため、ステップ 2 に直接進んでください。

1. オプション: ランチパッドからインストールしない場合は、 以下の手順を実行します。
   a. 「**スタート**」 > 「**すべてのプログラム**」 > 「**IBM Installation Manager**」 > 「**IBM Installation Manager**」をクリックして Installation Manager を開始します。

      注: Installation Manager の新しいバージョンが見つかった場合、そのバージョンをインストールしてから処理を続行するかどうかを確認するためのプロ

ンプトが表示されます。「**OK**」をクリックして、操作を続行します。この操作により、Installation Manager の新規バージョンのインストール、再始動、再開が自動的に実行されます。

b. リポジトリーのロケーションを定義します。「**ファイル**」 > 「**設定**」をクリックして「**Installation Manager の設定**」ページを開きます。

c. 「**リポジトリーの追加**」をクリックして、新しいリポジトリーのロケーションを追加します。 リポジトリー・ロケーションは、*image_directory*/disk1/IMmontk80/repository.config (Business Monitor Development Toolkit の場合) および *image_directory*/WTE_Disk/repository/repository.config (テスト環境の場合) です。*image_directory* には、Business Monitor Development Toolkit の抽出されたインストール・イメージが入ります。

d. 「**参照**」をクリックして、リポジトリーのロケーションを参照します。「**OK**」をクリックします。新しいリポジトリーのロケーションが、リポジトリー・リストに追加されます。

e. 「**リポジトリーの構成 (Repositories configuration)**」ページの「**OK**」をクリックして、設定を保存し、「**設定**」ページを終了します。

f. Installation Manager の「開始」ページで「**インストール**」をクリックします。

2. Business Monitor Development Toolkit パッケージと、インストールするパッケージの更新がすべて選択されていることを確認します。依存関係を持つ更新は、パッケージとともに自動的に選択またはクリアされます。 以下のパッケージが選択されます。

   - IBM Cognos® Business Intelligence (管理ユーザーでない場合はチェック・ボックスをクリアします)
   - WebSphere Application Server - ND (パッケージが既にインストールされている場合はチェック・ボックスをクリアします)
   - DB2 Express (既に DB2 データベースがインストールされている場合、または管理ユーザーでない場合はチェック・ボックスをクリアします)
   - IBM Business Monitor
   - Business Monitor Development Toolkit

3. 「ライセンス」ページで、選択したパッケージのご使用条件を確認します。

   複数のパッケージをインストールするよう選択した場合は、各パッケージにご使用条件がある場合があります。「**ライセンス**」ページの左側で、 各パッケージ・バージョンをクリックして、ご使用条件を表示してください。インストールするために選択したパッケージのバージョン (例えば、基本パッケージおよび更新) は、パッケージ名の下にリストされます。

   a. 使用許諾契約書のすべての条件に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックします。

   b. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。

4. 「ロケーション」ページで、Rational Application Developer パッケージを含んでいる ***package_group*** をクリックします。 選択したパッケージ・グループが、Toolkit の必須の前提条件を満たさない場合は、エラーが表示されます。

a. テスト環境を作成している場合、テスト環境のデフォルト・パスを変更できます。「**WebSphere Application Server - ND**」を選択し、テスト環境のパスを入力します。

b. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。

5. 「フィーチャー」ページで、インストールするパッケージのフィーチャーを選択します。選択しなかった場合、インストール可能なフィーチャーとして表示されません。

   a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。

   b. オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡潔な説明が「**詳細**」の下に表示されます。

   c. パッケージのフィーチャーを選択またはクリアします。Installation Manager では、自動的に他のフィーチャーとの依存関係が適用され、更新されたダウンロードのサイズと、インストールに必要なディスク・スペースを表示します。

      - 1 つ以上のスタンドアロン開発プロファイルを選択すると、インストール中にプロファイルが作成されます。選択したオプションに応じて、プロファイルが既に選択されている場合があります。

        スタンドアロン開発プロファイルは、IBM Business Monitor テスト環境を提供するデフォルトの開発プロファイルです。デフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールしないように選択しても、 Installation Manager を起動して、最初のページで「**変更**」をクリックすると、後でインストールすることができます。

   d. フィーチャーの選択が完了したら、「**次へ**」をクリックして先に進みます。

6. 「プロファイル」ページで、作成するスタンドアロン・プロファイルとテスト・サーバーの資格情報を入力します。 デフォルトのユーザー名は `admin` で、デフォルトのパスワードも `admin` です。

7. DB2 Express を選択した場合、「共通の構成」ページで DB2 のユーザー名とパスワードを入力し、「**次へ**」をクリックします。 デフォルトのユーザー名は `bpmadmin` です。ご使用のシステム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーに準拠したパスワードを選択してください。

   制約事項: ユーザー名に NL ストリングは使用できません。

8. IBM Business Process Manager Advanced: Process Server パッケージをインストールする前に、「要約」ページで、行った選択を検討します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。 進行標識で、インストールの完了率が示されます。

9. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。

   a. 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックし、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、インストール・ログのウィンドウを閉じる必要があります。

b. テスト環境のインストールを選択したかどうかに応じて、終了時にプロファイルを作成するオプションが表示される場合があります。インストールの一環として既にスタンドアロン・プロファイルを作成している場合は、「**なし**」を選択します。

c. 「**完了**」をクリックして、Installation Manager を終了します。

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

Toolkit のサイレント・インストール

Business Monitor Development Toolkit をサイレント ・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

コマンド行を使用した Toolkit のサイレント・インストール

コマンド行を使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールできます。

Rational Application Developer にインストールを実行する前に、以下の作業を完了している必要があります。

- Rational Application Developer 8.0.4をインストールした。
- そのインストールの一環として、Rational Application Developer フィーチャーである「**WebSphere Application Server バージョン 8.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

注: 電子イメージを (パスポート・アドバンテージ経由で) 使用して、または IBM が提供する物理メディアを使用して Rational Application Developer V8.0.4 をインストールした場合は、以下のことに注意してください。

- Business Monitor には、パスポート・アドバンテージから取得できる永続ライセンスが用意されています。
- Rational Application Developer の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、永続ライセンスを手動でインストールする必要があります。

重要: 非管理者ユーザーまたは非 root ユーザーとしてテスト環境を使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールする場合、インストールの開始前に DB2 をインストールする必要があります。

Business Monitor Development Toolkit のインストールに必要な前提となる基本製品がない場合は、サイレント・インストールの一環としてそれらをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (テスト環境をインストールする場合)

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。

- 必要な基本製品および Toolkit をインストールします。

Business Monitor Development Toolkitをサイレント・インストールするには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行して、DB2 および WebSphere 管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

   重要: Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 が稼働している場合は、「**管理者として実行**」を右クリックして選択し、コマンド・プロンプトを開始します。

   ```
   IM_location¥eclipse¥tools¥imutilsc -silent -nosplash
    encryptString password_to_encrypt
   ```

   ```
   IM_location/eclipse/tools/imutilsc -silent
    -nosplash encryptString password_to_encrypt
   ```

2. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。
   `-acceptLicense` をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
3. 次のコマンドを実行します。

   重要: Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「**管理者として実行**」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

   ```
   extract_directory¥disk1¥IM_win32
   ¥tools¥imcl install list_of_product_IDs
   -acceptLicense -installationDirectory location -repositories
   repository -showVerboseProgress -log logName.log
   ```

   ここで、

   - *list_of_product_IDs* は、インストールする製品の ID をスペースで区切ったリストです。

表 1. 製品 ID

製品	製品 ID
Business Monitor Development Toolkit	com.ibm.wbimonitor.toolkit.v80
Installation Manager	com.ibm.cic.agent,agent_core,agent_jre

   - *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。
   - *repository* は、ファイルを抽出したリポジトリーのパスであり、以下の 1 つ以上のディレクトリーです。

     ```
     extract_directory/disk1/IMmontk80
     extract_directory/disk1/IM_win32
     ```

     複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。
   - *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

   このコマンドを実行すると、デフォルト・フィーチャーの製品がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、imcl のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

4. **テスト環境もインストールする場合**、別のインストール・ディレクトリーと、必要な製品 ID およびキーを指定して、同じコマンドを実行します。

```
extract_directory¥disk1¥IM_win32¥tools¥imcl
install list_of_product_IDs
-acceptLicense -testInstallationDirectory
location -repositories repository -properties
key=value,key=value -showVerboseProgress -log logName.log
```

ここで、

- *list_of_product_IDs* は、インストールする製品の ID のスペースで区切られたリストです。

表 2. テスト環境用の製品 ID

製品	製品 ID
IBM Business Monitor	com.ibm.websphere. MON.V80 (デフォルト・フィーチャーに使用) または com.ibm.websphere.MON.V80, wbm.core.feature, wbm.profile.feature (IBM Business Monitor を IBM Business Monitor プロファイルと一緒にインストールするために使用) または com.ibm.websphere.MON.V80, wbm.core.feature, wbm.wps.profile (IBM Business Monitor を IBM Business Monitor および IBM BPM Process Server プロファイルと一緒にインストールするために使用) または com.ibm.websphere.MON.V80, wbm.core.feature, wbm.wesb.profile.feature (IBM Business Monitor を IBM Business Monitor および IBM WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルと一緒にインストールするために使用)
WebSphere Application Server Network Deployment (32 ビット)	com.ibm.websphere.ND.v80, core.feature,ejbdeploy, thinclient,embeddablecontainer, samples,com.ibm.sdk.6_32bit (すべての必須フィーチャーを含む)
WebSphere Application Server Network Deployment (64 ビット)	com.ibm.websphere.ND.v80, core.feature,ejbdeploy, thinclient,embeddablecontainer, samples,com.ibm.sdk.6_64bit (すべての必須フィーチャーを含む)
DB2 for Windows (32 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32
DB2 for Windows (64 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia64

表 2. テスト環境用の製品 ID (続き)

製品	製品 ID
IBM Cognos BI for Windows x86 (32 ビット)	com.ibm.ws.cognos.v1011.winia32
IBM Cognos BI for Windows x64 (64-ビット)	com.ibm.ws.cognos.v1011.winia64

- *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。
- *repository* は、ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスで、以下のいずれかのディレクトリーです。

  ```
  extract_directory/repository/repos_32bit
  extract_directory/repository/repos_64bit
  ```

  複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。
- *key=value* は、インストール環境に渡すキーと値のコンマで区切られたリストです。コンマとコンマの間にスペースを入れないでください。IBM Installation Manager を使用して、暗号化パスワードを作成します。

表 3. テスト環境用のキー

キー	説明

user.select.64bit.image	64 ビット・オペレーティング・システムにインストールする場合、以下の行を正確に追加します。
	`user.select.64bit.image,,`
	`com.ibm.websphere.ND.v80=true`
	
	デフォルト値は false です。

user.db2.admin.username	DB2 データベースにアクセスする権限を持つユーザー名。デフォルト値は bpmadmin です。
user.db2.admin.password	ユーザー名のパスワード。ご使用のシステム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーに準拠したパスワードを選択してください。
user.bpm.admin.username	管理コンソールのユーザー名。デフォルト値は admin です。このプロパティーは、プロファイルを作成する場合にのみ必要です。
user.bpm.admin.password	ユーザー名のパスワード。デフォルト値は admin です。このプロパティーは、プロファイルを作成する場合にのみ必要です。
user.db2.port	DB2 データベースのポート。デフォルト値は 50000 です。

- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

このコマンドを実行すると、デフォルトのフィーチャーを含めてテスト環境がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、imcl のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

Installation Manager により、リストした製品がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

以下の例では、Business Monitor Development Toolkit が Windows にインストールされます。

```
imcl install com.ibm.monitor.toolkit.v80
-acceptLicense -installationDirectory C:¥IBM¥TKIT -repositories
D:¥temp¥montk¥disk1¥
IMmontk80 -showVerboseProgress -log silentinstall.log
```

関連資料:

imcl のコマンド行引数

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

応答ファイルを使用した Toolkit のサイレント・インストール

応答ファイルを作成してから、その応答ファイルを使用して Toolkit をインストールするコマンドを実行することで、Business Monitor Development Toolkit をインストールできます。

Rational Application Developer にインストールを実行する前に、以下の作業を完了している必要があります。

- Rational Application Developer 8.0.4をインストールした。
- そのインストールの一環として、Rational Application Developer フィーチャーである「**WebSphere Application Server バージョン 8.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

注: 電子イメージを (パスポート・アドバンテージ経由で) 使用して、または IBM が提供する物理メディアを使用して Rational Application Developer V8.0.4 をインストールした場合は、以下のことに注意してください。

- Business Monitor には、パスポート・アドバンテージから取得できる永続ライセンスが用意されています。
- Rational Application Developer の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、永続ライセンスを手動でインストールする必要があります。

重要: 非管理者ユーザーまたは非 root ユーザーとしてテスト環境を使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールする場合、インストールの開始前に DB2 をインストールする必要があります。

Business Monitor Development Toolkitをサイレント・インストールするには、次の手順を実行します。

1. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。
   `-acceptLicense` をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
2. Business Monitor Development Toolkit をインストールする応答ファイルを作成します。 以下のディレクトリーにあるサンプル応答ファイルをコピーし、独自の応答ファイルを作成します。

   extract_directory/disk1/responsefiles/responsefile.install.xml
3. サンプル応答ファイルに指定されたデフォルト値では基本インストールが実行されますが、ファイルとそのコメントを確認し、ご使用の環境の必要に応じてパラメーターを変更してください。

   重要: 応答ファイル内のリポジトリー・ロケーションが環境内の正しい場所を指していることと、他のパラメーター値も適切であることを確認してください。
4. 次のコマンドを実行します。

   重要: Business Monitor Development Toolkit を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 でインストールまたは実行する場合は、`launchpad.exe` を右クリックして「**管理者として実行**」を選択することにより、Microsoft Windows ユーザー・アカウント特権をプロモートする必要があります。これは、管理ユーザーにも管理ユーザー以外にも必要です。

   管理者としてインストールする場合:

   ```
   extract_directory¥IM¥installc.exe
   -acceptLicense input extract_directory¥disk1
   ¥responsefiles¥responsefile.install.xml
   -log preferred_log_location¥silent_install.log
   ```

   非管理者としてインストールする場合:

   ```
   extract_directory¥IM¥userinstc.exe
   -acceptLicense input extract_directory¥disk1
   ¥responsefiles ¥responsefile.install.xml -log
   preferred_log_location¥silent_install.log
   ```

Installation Manager は、必要な前提条件と Business Monitor Development Toolkit をインストールし、指定されたディレクトリーにログ・ファイルを書き込みます。

関連タスク:

Installation Manager でのサイレント・インストール

Installation Manager を使用した応答ファイルの記録

Development Toolkit の更新

Rational Application Developer 環境で、IBM Business Monitor Development Toolkit を更新します。

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

フィックスパックの対話式インストール

IBM Business Monitor Development Toolkit のフィックスパックは、対話式にインストールすることができます。

デフォルトでは、リポジトリー設定がローカル更新サイトをポイントしている場合を除いて、インターネットにアクセスできる必要があります。

インストール済みのパッケージごとに、デフォルトの IBM 更新リポジトリーのロケーションが組み込まれています。 Installation Manager で、インストール済みパッケージの IBM 更新リポジトリー・ロケーションを検索するには、「リポジトリー」設定ページにある「**インストールおよび更新時にサービス・リポジトリーを検索 (Search service repositories during installation and updates)**」設定が選択されている必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。

更新処理の途中で、Installation Manager は、パッケージの基本バージョンのリポジトリーのロケーションを尋ねるプロンプトを出すことがあります。DVD またはその他のメディアから製品をインストールした場合は、更新機能を使用する際にそれらのメディアが使用可能になっている必要があります。

詳しくは、Installation Manager インフォメーション・センターを参照してください。

重要: 以前のバージョンでプロファイルを作成した場合は、それらのプロファイルが保持されるので、再作成の必要はありません。

この手順を使用して、基盤となる IBM DB2 Express または IBM Cognos BI に更新をインストールすることはできません。これらの製品は、通常の更新処理を従って更新する必要があります。

製品パッケージの更新を検索してインストールするには、以下の手順に従います。

1. 更新を行う前に、Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてください。
2. Installation Manager を開始します。Installation Manager の「開始」ページで、「**更新**」をクリックします。
3. IBM Installation Manager がシステム上に検出されない場合、または古いバージョンがインストールされている場合は、最新リリースのインストールに進む必要があります。ウィザードに表示される指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了してください。
4. 「パッケージの更新」ウィザードで、更新する製品パッケージが含まれているパッケージ・グループを選択するか、「**すべてを更新**」チェック・ボックスを選択し、「**次へ**」をクリックします。 Installation Manager は、そのリポジトリーおよび更新するソフトウェアの定義済み更新サイトで更新を検索します。検索の進行状況が進行標識で示されます。
5. パッケージの更新が検出されると、「パッケージの更新 (Update Packages)」ページの「**更新**」リスト内の対応するパッケージの下に、更新が表示されます。

デフォルトでは、推奨される最新の更新のみが表示されます。使用可能なパッケージについて検出されたすべての更新を表示するには、「**すべて表示**」をクリックします。

a. 更新の詳細を確認するには、その更新をクリックし、「**詳細**」の下に表示される説明を参照します。

b. 更新に関する追加情報がある場合は、説明テキストの最後に「**詳細情報**」リンクが含まれています。このリンクをクリックして、ブラウザーで情報を表示します。更新をインストールする前に、この情報を検討してください。

6. インストールする更新を選択するか、デフォルトの選択を復元するために「**推奨を選択**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。依存関係にある更新は、自動的に一緒に選択または一緒にクリアされます。
7. 「ライセンス」ページで、選択した更新のご使用条件を読みます。「ライセンス」ページの左側に、選択した更新に関するライセンスのリストが表示されます。それぞれの項目をクリックして、ご使用条件のテキストを表示します。ご使用条件にすべて同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックします。その後、「**次へ**」をクリックします。
8. 更新をインストールする前に、「要約」ページで、行った選択を検討します。

   a. これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして、変更を行います。

   b. 問題のない状態になったら、「**更新**」をクリックし、更新をダウンロードしてインストールします。インストールの完了のパーセンテージが進行標識で示されます。
9. オプション: アップグレード・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが、ページの上部に表示されます。「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するにはインストール・ログのウィンドウを閉じる必要があります。
10. 「**終了**」をクリックして、ウィザードを閉じます。
11. Installation Manager を閉じます。

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

フィックスパックのロールバック

「パッケージのロールバック (Roll back packages)」ウィザードを使用すると、IBM Business Monitor Development Toolkit からフィックスパックを削除して、前のバージョンに戻すことができます。

ロールバック・プロセス中は、Installation Manager から前バージョンのパッケージのファイルにアクセスする必要があります。デフォルトでは、これらのファイルはパッケージをインストールしたときにシステムに格納されています。ワークステーション上にファイルがない場合は、Installation Manager の設定で (「**ファイル**」> 「**設定**」>「**リポジトリー**」)、前バージョンの製品をインストールしたときのインストール元リポジトリー・ロケーションを指定する必要があります。DVD やその他のメディアから製品をインストールした場合は、ロールバック・フィーチャーの使用時にその DVD またはメディアが使用可能でなければなりません。

製品パッケージに更新を適用した後で、更新を削除して製品を前のバージョンに戻す場合は、ロールバック・フィーチャーを使用します。ロールバック・フィーチャーを使用すると、Installation Manager によって、更新されたリソースがアンインストールされ、前バージョンのリソースが再インストールされます。

注: スタンドアロン・サーバーに対してロールバック・プロセスを実行すると、WebSphere テスト環境が使用不可になる可能性があります。ロールバック・プロセスの完了後に、テスト環境プロファイルをリセットする必要があります。テスト環境プロファイルのリセット方法については、『デフォルトのサーバー・プロファイルの作成またはリセット』を参照してください。

ロールバック・ウィザードの使用について詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

更新したパッケージをロールバックするには、以下の手順に従います。

1. Installation Manager の「開始」ページで、「**ロールバック**」をクリックして、ロールバック・ウィザードを開始します。
2. 「**パッケージのロールバック**」リストから、ロールバックするパッケージを選択します。
3. 画面の指示に従ってウィザードの手順を完了します。

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

フィックスパックのサイレント・インストール

コマンド行を使用して、Business Monitor Development Toolkit のフィックスパックをインストールできます。

この手順を使用して、基盤となる IBM DB2 Express または IBM Cognos BI に更新をインストールすることはできません。これらの製品は、通常の更新処理を従って更新する必要があります。

Toolkit をサイレントに更新するには、以下の手順を実行します。

1. 更新の前にライセンス条項を読み、承諾します。`-acceptLicense` をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
2. 次のコマンドを実行します。

   重要: Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「**管理者として実行**」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

   ```
   extract_directory¥disk1¥IM_win32¥tools¥imcl
    install com.ibm.wbimonitor.toolkit.v80
   -acceptLicense -installationDirectory location -repositories
   repository -showVerboseProgress -log logName.log
   ```

   ここで、

   - *location* は、製品を更新するディレクトリーへのパスです。

- *repository* は、フィックスパック・ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスです。複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。
- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

3. **テスト環境も更新する場合**、正しいインストール・ディレクトリーと、必要な製品 ID およびキーを指定して、同じコマンドを再度実行します。

```
extract_directory¥disk1¥IM_win32¥tools¥imcl install list_of_product_IDs
-acceptLicense -testInstallationDirectory location -repositories
repository -showVerboseProgress -log logName.log
```

ここで、

- *list_of_product_IDs* は、更新する製品の ID をスペースで区切ったリストです。

表 4. テスト環境用の製品 ID

製品	製品 ID
IBM Business Monitor	com.ibm.websphere. MON.V80
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm.websphere. ND.v80

- *location* は、製品が更新されるディレクトリーへのパスです。
- *repository* は、フィックスパック・ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスです。複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。
- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

Installation Manager により、製品が更新され、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

次の例では、Business Monitor Development Toolkit を更新します。

```
imcl install com.ibm.wbimonitor.toolkit.v80
-acceptLicense -installationDirectory
C:¥IBM¥TKIT -repositories D:¥temp¥montk¥fixpack1
-showVerboseProgress -log update.log
```

関連資料:

imcl のコマンド行引数

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

Development Toolkit のアンインストール

IBM Installation Manager を使用することによって、Business Monitor Development Toolkit をコンピューターから除去できます。IBM Installation Manager では、対話方式とサイレント方式の両方をサポートします。

開発ツールキットをアンインストールするには、事前に以下の作業を完了しておく必要があります。

- Rational Application Developer からの WebSphere MQ Workflow 用 FDL to Monitor Model ユーティリティー のアンインストール

プラグインのアンインストール方法の説明については、 21 ページの『WebSphere MQ Workflow 用 FDL to Monitor Model ユーティリティーの除去』を参照してください。

関連タスク:

21 ページの『WebSphere MQ Workflow 用 FDL to Monitor Model ユーティリティーの除去』

Business Monitor Development Toolkit を除去する必要がある場合は、まず Integration Designer または Rational Application Developer から FDL to monitor model ユーティリティーを除去する必要があります。そうしない場合は、警告メッセージが複数表示されます。

対話式での Toolkit のアンインストール

IBM Installation Manager 対話方式を使用して、コンピューターから Business Monitor Development Toolkit を除去します。対話方式では、除去するパッケージを選択できるインターフェースが用意されています。

IBM Installation Manager 対話方式で開発ツールキットを除去するには、次の手順を実行します。

1. Installation Manager を使用してインストールしたプログラムを終了します。
2. 稼働中のサーバーをすべて停止します。
3. Installation Manager を始動します。「開始」ページで、「**アンインストール**」をクリックします。
4. 「パッケージのアンインストール」ページで IBM Business Process Manager Advanced: Process Server および関連するパッケージを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「要約」ページで、アンインストールするパッケージのリストを確認し、「**アンインストール**」をクリックします。 アンインストールが終了すると、「完了」ページが開きます。
6. 「**完了**」をクリックしてウィザードを終了します。

Toolkit のサイレント・アンインストール

Business Monitor Development Toolkit をサイレント・インストール・モードでアンインストールできます。サイレント・モードでアンインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

コマンド行を使用した Toolkit のサイレント・アンインストール

Installation Manager のコマンド行モードを使用して、Business Monitor Development Toolkit をアンインストールできます。

Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じます。

アンインストールするには、インストール時に使用したのと同じユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。

コマンド行を使用して Toolkit をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. コマンド・プロンプトを開き、ディレクトリーを Installation Manager の下の `/eclipse/tools` ディレクトリーに変更します。

   重要: Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「**管理者として実行**」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

2. 以下のコマンドを適切に置換して、コマンドを実行します。

   ```
   imcl uninstall list_of_product_IDs -installationDirectory installationDirectory
    -log logLocation
   ```

   a. *`list_of_product_IDs`* をアンインストールする製品の ID のスペースで区切られたリストに置き換えます。

表 5. 製品 ID

製品	製品 ID
Business Monitor Development Toolkit	com.ibm.wbimonitor.toolkit.v80
Installation Manager	com.ibm.cic.agent

   b. *`installationDirectory`* を製品のインストール場所に置き換えます。

   c. *`logLocation`* を、情報を記録する場所およびファイル名に置き換えます。

3. **テスト環境もアンインストールする場合**、適切な置き換えを行い、同じコマンドを再び実行します。

   ```
   imcl uninstall list_of_product_IDs -installationDirectory
    testInstallationDirectory
   -log logLocation
   ```

   a. *`list_of_product_IDs`* をアンインストールする製品の ID のスペースで区切られたリストに置き換えます。

      重要: DB2 Express のインストール済み環境は、複数の製品 (リモート・システム上の製品を含む) に使用されている場合があります。DB2 Express をアンインストールすると、DB2 Express のデータベースとデータベース・アセットがすべて削除されます。

表 6. テスト環境用の製品 ID

製品	製品 ID
IBM Business Monitor	com.ibm.websphere. MON.V80
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm. websphere. ND.v80
DB2 for Windows (32 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32
DB2 for Windows (64 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia64
IBM Cognos BI for Windows x86 (32 ビット)	com.ibm.ws.cognos.v1011.winia32
IBM Cognos BI for Windows x64 (64-ビット)	com.ibm.ws.cognos.v1011.winia64

   b. *`installationDirectory`* を製品のインストール場所に置き換えます。

   c. *`logLocation`* を、情報を記録する場所およびファイル名に置き換えます。

以下の例では、Business Monitor Development Toolkit が Windows からアンインストールされます。

```
C:¥Program Files¥IBM¥Installation Manager¥eclipse¥tools>imcl
uninstall com.ibm.wbimonitor.toolkit.v80
-installationDirectory C:¥IBM¥TKIT80 -log uninstalllog.txt
```

Installation Manager により、リストされた製品がアンインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き込まれます。

関連資料:

imcl のコマンド行引数

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

応答ファイルを使用した Toolkit のサイレント・アンインストール

応答ファイルを作成してから、その応答ファイルを使用して Toolkit をアンインストールするコマンドを実行することで、Business Monitor Development Toolkit をアンインストールできます。

応答ファイルを使用して Toolkit をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. ツールキット・インストール・イメージのディレクトリーに移動します。
2. `responsefile.uninstall.xml` ファイルのコピーを作成します。

   また、製品アンインストール用のサンプル応答ファイルも、解凍されるインストール・イメージに次のファイル名で含まれています。

   - *extract_directory*¥disk1¥responsefiles¥responsefile.uninstall.xml

   製品 DVD では次のファイル名で提供されています。

   - *DVD_root*¥disk1¥responsefiles¥responsefile.uninstall.xml
3. 応答ファイル・テンプレートのテキストの指示に従ってパラメーターを変更し、独自の応答ファイルを作成します。 応答ファイルは、Installation Manager でアクションを記録することによっても作成できます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager で行った選択が XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイル内のデータを使用してインストールを実行します。
4. ファイルを保存して閉じます。
5. コマンド・プロンプトから、IBM Installation Manager のインストール・ディレクトリーに移動します。 例えば、以下のように入力します。

   ```
   cd C:¥Program Files¥IBM¥InstallationManager¥eclipse¥tools
   ```
6. 次のコマンドを実行依頼します。

   ```
   imcl.exe input
   dvd_root¥disk1¥responsefiles¥responsefile.uninstall.xml -log
   preferred_log_location¥silent_install.log
   ```

Installation Manager により、Business Monitor Development Toolkit がアンインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き込まれます。

関連情報:

IBM Installation Manager インフォメーション・センター

WebSphere MQ Workflow 用 FDL to Monitor Model ユーティリティーの除去

Business Monitor Development Toolkit を除去する必要がある場合は、まず Integration Designer または Rational Application Developer から FDL to monitor model ユーティリティーを除去する必要があります。そうしない場合は、警告メッセージが複数表示されます。

Integration Designer または Rational Application Developer からユーティリティーを除去するには、以下の手順を実行します。

1. 「**ヘルプ**」 > 「**ソフトウェア更新**」 > 「**構成の管理**」をクリックします。
2. ツリーを展開して、「**FDL to Monitor Model ユーティリティー機能 1.0.9**」を見つけ出し、それを選択します。
3. 「**FDL to Monitor Model ユーティリティー機能 1.0.9**」を右クリックします。メニューに、「**置換**」、「**無効にする**」、「**アンインストール**」、および「**プロパティー**」が表示されます。
4. 「**アンインストール**」をクリックします。

関連概念:

17 ページの『Development Toolkit のアンインストール』
IBM Installation Manager を使用することによって、Business Monitor Development Toolkit をコンピューターから除去できます。IBM Installation Manager では、対話方式とサイレント方式の両方をサポートします。

ツールキットのインストール済み環境のトラブルシューティング

Business Monitor Development Toolkit をインストールまたは削除するときに、いくつかの問題が発生する可能性があります。

「Business Monitor Support」ページの『Technotes』セクションで、最新のトラブルシューティングのヒントを見つけることができます。

関連情報:

WebSphere Business Monitor 技術情報

サーバーが「サーバー (Servers)」ビューに表示されない

IBM Business Monitor Development Toolkit をインストールすると、IBM Business Process Manager サーバーが Rational Application Developer または Integration Designer の「サーバー (Servers)」ビューに表示されます。プロファイルが作成されていたことを確認し、`-clean` パラメーターを使用して Rational Application Developer または Integration Designer を再始動してください。

1. profile_root ディレクトリーにプロファイルが作成されたことを確認します。
2. `-clean` パラメーターを指定して、Rational Application Developer または Integration Designer を始動します。

a. コマンド・プロンプトを開き、Rational Application Developer または Integration Designer がインストールされているディレクトリーに移動します。

b. ご使用の開発環境に応じて、以下のいずれかのコマンドを入力します。

   Rational Application Developer: `eclipse.exe -clean`

   Integration Designer: `wid.exe -clean`

3. サーバーが依然として表示されない場合は、『新規サーバーをテスト環境に追加』の指示に従ってサーバーを新たに作成します。

ワークスペース・サーバー構成の手動削除

未解決のプロジェクト・リソースに関する問題が発生しないようにするために、Toolkit のアンインストール後は、Business Monitor Development Toolkit ワークスペースを使用しないでください。ただし、非 Toolkit プロジェクトのワークスペースを使用する必要がある場合は、最初に、残りの Toolkit サーバー構成を除去する必要があります。

IBM Installation Manager を使用して Business Monitor Development Toolkit を除去した場合、IBM Business Process Manager サーバーの構成は、ワークスペースに残されます。アンインストールが正常に完了した後で以下の手順を実行すると、ワークスペースから構成を削除できます。

1. 開発アプリケーションで、「**ウィンドウ**」 > 「**ビューの表示**」 > 「**サーバー**」を選択します。
2. 「サーバー (Servers)」ビューで、ご使用の環境に該当するサーバー構成を削除します。
3. サーバー削除の確認メッセージが表示されたら、実際に実行されているサーバーの削除に関連する項目を選択して、「**OK**」をクリックします。

関連情報:

WebSphere Business Monitor 技術情報

標準インストールと構成オプションを使用した場合に再インストールで新しいプロファイルを作成できない

標準インストールと構成オプションを使用して製品を同じロケーションに再インストールしようとした場合や、アンインストールに失敗した後で再インストールしようとした場合に、新しいプロファイルを作成できないことが原因でインストールが失敗することがあります。

テスト環境用に作成したデータベースは、新規プロファイルを作成するために除去しておく必要があります。

そのようなデータベースがアンインストール時に自動的に除去されない場合は手動による除去を行ってください。

- qbpmaps プロファイルの場合、デフォルト・データベースは QBPMDB、QPDWDB、 および QCMNDB です。
- qesb プロファイルの場合、デフォルト・データベースは ECMNDB および QECMNDB (一方または両方) です。

- qmwas プロファイルの場合、デフォルト・データベースは MONITOR および COGNOSCS です。
- qmbpmaps プロファイルの場合、デフォルト・データベースは QBPMDB、QPDWDB、 QCMNDB、 MONITOR、および COGNOSCS です。
- qmesb プロファイルの場合、デフォルト・データベースは ECMNDB、QECMNDB、 MONITOR、および COGNOSCS です。

プロジェクト交換ファイルからのモニター・モデルのインポート

以前のリリースの Business Monitor Development Toolkit のモニター・モデルが含まれているプロジェクト交換 (PI) .zip ファイルがある場合、そのモニター・モデルを Rational Application Developer または Integration Designer のワークスペースにインポートすることができます。

PI ファイルを Rational Application Developer または Integration Designer のワークスペースにインポートするには、以下の手順を実行します。

1. Rational Application Developer または Integration Designer で、「**ファイル**」 > 「**インポート**」をクリックします。
2. 「**一般**」を展開し、「**Existing Projects into Workspace**」をクリックしてから「**次へ**」をクリックします。
3. 「プロジェクトのインポート」パネルで、「**Select archive file**」をクリックし、「**参照**」をクリックします。 PI .zip ファイルに移動して、「**開く**」をクリックします。 「プロジェクト」ボックス内で、プロジェクトを確認することができます。
4. インポートするプロジェクトの横に必ずチェック・マークを付けます。
5. 「**終了**」をクリックします。

アーカイブ・ファイルへのモニター・モデルのエクスポート

Rational Application Developer または Integration Designer のモニター・モデルをアーカイブ・ファイルにエクスポートすることができます。

Rational Application Developer または Integration Designer ワークスペースからアーカイブ・ファイルをエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. Rational Application Developer または Integration Designer で、「**ファイル**」 > 「**エクスポート**」をクリックします。
2. 「**一般**」を展開し、「**アーカイブ**」をクリックしてから「**次へ**」をクリックします。
3. 「アーカイブ・ファイル」パネルで、アーカイブ・ファイルに含めるプロジェクトのチェック・ボックスを選択します。
4. 「**宛先アーカイブ・ファイル**」フィールドにファイル名入力します。「**Save in zip format**」オプションと「**Create directory structure for files**」オプションを選択するようにしてください。
5. 「**終了**」をクリックします。

第 2 章 ディレクトリーの規則

このトピックでは、IBM Business Process Manager 製品および製品コンポーネントにおけるデフォルトのパスおよびフォルダー名を定義します。

ご使用のファイル・パスが、製品のインストール時に決定されたデフォルトのファイル・パスと異なるため、資料ではこれらの値を変数として指定します。資料全体で使用される変数は、以下のセクションで定義されます。

インストール・イメージ

インストール・イメージ は、製品 CD 上のファイル構造を指すか、製品 CD をコピーするか、パスポート・アドバンテージまたは他の配布場所からダウンロードしたソフトウェア・パッケージを解凍することによって、ローカルに作成されたファイル構造を指します。

monitor_installation_image
: IBM Business Process Manager のインストール・イメージを示します。

toolkit_installation_image
: Business Monitor Development Toolkit のインストール・イメージを示します。

デフォルトのインストール・ロケーション

ソフトウェアのインストール時に、インストール・ロケーションを指定しない場合、インストール・プログラムはデフォルトのロケーションを使用してインストールします。このロケーションは、デフォルトのインストール・ディレクトリーと呼ばれます。製品をデフォルトのディレクトリーにインストールすることもそれ以外の場所にインストールすることもある上、デフォルト・ディレクトリー構造はオペレーティング・システムによって異なっている場合があるため、これらのパスはこの資料全体で変数として定義されます。

monitor_root
: 以下のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーは、**Installation Manager からインストールするときの** IBM Business Process Manager 用のディレクトリーです。

  AIX®: `/usr/IBM/WebSphere/AppServer`

  Linux: `/opt/ibm/WebSphere/AppServer`

  Solaris: `/opt/ibm/WebSphere/AppServer`

  Windows: `C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer`

  ヒント: Windows にインストールする場合は、パスをできるだけ短くしてください。そうしないと、後で他のコンポーネントのパスをこのパスに追加して 255 文字のパス制限を超えたときに、問題が発生する可能性があります。

© Copyright IBM Corp. 2011

以下のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーは、**サイレント・インストール時の** IBM Business Process Manager 用のディレクトリーです。

AIX: `/usr/IBM/WebSphere/MonServer`

Linux: `/opt/ibm/WebSphere/MonServer`

Solaris: `/opt/ibm/WebSphere/MonServer`

Windows: `C:¥IBM¥WebSphere¥MonServer`

app_server_root

以下のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーは、WebSphere Application Server 用です。

AIX: `/usr/IBM/WebSphere/AppServer`

Linux: `/opt/IBM/WebSphere/AppServer`

Solaris: `/opt/IBM/WebSphere/AppServer`

Windows: `C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer`

profile_root

以下のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーは、**Installation Manager からインストールするときの** WebSphere Application Server プロファイル用のディレクトリーです。

AIX: `/usr/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/`*`profile_name`*

Linux: `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/`*`profile_name`*

Solaris: `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/`*`profile_name`*

Windows: `C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥profiles¥`*`profile_name`*

以下のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーは、**サイレント・インストール時の** WebSphere Application Server プロファイル用のディレクトリーです。

AIX: `/usr/IBM/WebSphere/MonServer/profiles/`*`profile_name`*

Linux: `/opt/IBM/WebSphere/MonServer/profiles/`*`profile_name`*

Solaris: `/opt/IBM/WebSphere/MonServer/profiles/`*`profile_name`*

Windows: `C:¥Program Files¥WebSphere¥MonServer¥profiles¥`*`profile_name`*

portal_root

以下のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーは、WebSphere Portal 用です。

AIX: `/usr/IBM/WebSphere/PortalServer`

Linux: `/opt/IBM/WebSphere/PortalServer`

Solaris: `/opt/IBM/WebSphere/PortalServer`

Windows: `C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥PortalServer`

integration_dev_root

以下のパスは、Integration Designer 用のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

Windows: `C:¥IBM¥IntegrationDesigner¥v8.0`

Linux: `/opt/IBM/IntegrationDesigner/v8.0`

app_dev_root

以下のパスは、Rational Application Developer 用のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

Windows: `C:¥Program Files¥IBM¥SDP`

Installation Manager 用のデフォルトのインストール・ディレクトリー

Installation Manager は 2 つのデフォルト・ディレクトリーを使用します。1 つは、製品のランチパッドが Installation Manager をインストールするディレクトリーです。もう 1 つは、エージェント・データのロケーション・ディレクトリーです。Installation Manager は、アプリケーションと関連付けられたデータ (Installation Manager によって実行された操作のステートとヒストリーなど) にこのディレクトリーを使用します。エージェント・データのロケーションについて詳しくは、関連リンクで『エージェント・データのロケーション』を参照してください。

root_installation_directory

以下のパスは、root ユーザーまたは管理者ユーザー用の Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

AIX: `/opt/IBM/InstallationManager/eclipse`

Linux: `/opt/IBM/InstallationManager/eclipse`

Solaris: `/opt/IBM/InstallationManager/eclipse`

Windows: `C:¥Program Files¥IBM¥Installation Manager¥eclipse`

nonroot_installation_directory

以下のパスは、非 root ユーザーまたは非管理ユーザー用の Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

AIX: *user_home*`/IBM/InstallationManager/eclipse`

Linux: *user_home*`/IBM/InstallationManager/eclipse`

Solaris: *user_home*`/IBM/InstallationManager/eclipse`

Windows: `C:¥Documents and Settings¥`*userID*`¥IBM¥Installation Manager¥eclipse`

root_agent_data_directory

以下のパスは、root ユーザーまたは管理者ユーザー用の Installation Manager のデフォルトのエージェント・データのロケーション・ディレクトリーです。

AIX: `/var/ibm/InstallationManager`

Linux: `/var/ibm/InstallationManager`

Solaris: `/var/ibm/InstallationManager`

Windows: `C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Installation Manager`

nonroot_agent_data_directory

以下のパスは、非 root ユーザーまたは非管理ユーザー用の Installation Manager のデフォルトのエージェント・データのロケーション・ディレクトリーです。

AIX: *user_home*/var/ibm/InstallationManager

Linux: *user_home*/var/ibm/InstallationManager

Solaris: *user_home*/var/ibm/InstallationManager

Windows: C:¥Documents and Settings¥*userID*¥Application Data¥IBM¥Installation Manager

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で、IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任または保証条件は適用されないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。 IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

© Copyright IBM Corp. 2011

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。 IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があり、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。お客様は、IBM のアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、 IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. 2000, 2011. All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標およびサービス・マーク

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Adobe は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Printed in Japan

日本アイ･ビー･エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21